くの如く長い歴史を持つてゐる摩訶衍は今日では全く日本化せられ、最早印度のものでもなければ支那のものでもない。今日では全く日本のものである。日本民族のものである。此の意味に於いて、摩訶衍は確かに日本民族の上に立脚した世界的精神運動の力素だと思ふ。

世界は今や大なる轉換期に臨んでゐる。轉換期は一面に於いて危險性を帶びる。而して世界人類は等しく徹底的眞實文化の建設を急ぎ、その運動を待ち焦れてゐる。この種の世界的精神運動卽ち摩訶衍的新運動の火蓋は果して何處の國で切られるであらうか。米國が先んずるか、日本が先んずるか、將た英國が起すか。世界改造の一大轉期に當つて常に遲れ勝ちであつた我が國に於いて世界的摩訶衍運動の第一聲を擧げたいと思ふ。――（一九二〇・一〇・十五・稿了）――

選擇集古版木の發見及び古版本の種類（未定稿）

藤堂祐範

余は日常職務の關係から希覯珍書に接する機會多きを以て、宗祖撰述の選擇集の

古版に種々異版あることを知り、彼此對照して其の種類を甄別せんとの念、頻りなりし折柄、大正八年四月宗教界第十五卷第四號に新村博士が選擇集古版本考を掲載せられしより、更に其の希望を進めんとて、本集の古版を隨時諸處に檢索せるに、計らずも本年九月知恩院藏版倉庫の廢殘古版木の堆積裡より數十枚の本集古版木を發見し、是を仔細に點檢するに兩面に十七字詰六行のもの四頁分宛鏤刻せられありて、其の一面の左端には選の一字と番號の數字とを陰刻せり、其の數字に依れば全數三十三枚の內一、二、三、四、五、六、八、九、十、十一、十四、十七、二十一、二十三、二十四、二十五、三十一、三十三の十九枚あり、其の最後の第三十三枚の兩面は各刊記ありて、一面は延應版の刊記にして、他面は永享版のそれなり、此の兩刊記を法然院所藏の延應版本及び新知恩院所藏の永享版本に比較するに、其の字體字形寸毫も違はず、約七百の星霜を閱みし、その間知恩院は數度の火災興廢ありしも、儼然其の面影を印することを得る、實に親しく宗祖の尊容を拜して選擇直受の想あらしむるものなり。

斯く兩版の跋文が同一版木に印刻せられ居るは、永享版は延應版の覆刻にして、全く延應版磨滅摺寫に堪へざるを以て、二百年後の永享十一年に延應版を覆刻の時、直に其の版木の裡面を利用せるものと見ゆ、併し殘餘の十八枚は此の第三十三の版木

の如く、表裏同一文に非ざるを以て、塵埃臺糞を掃ふて、仔細に點檢せざれば斷定し難きも、此の刊記より推斷すれば、延應永享の両版木なる事を想像し得べし。

兎にあれ此の版本の發見は、現今唯一部宛殘れる延應永享の両版本の價値を重からしむるのみならず、今日現存古版木中、明に刊行年月を誌せる南都興福寺所藏の建久六年の陰刻銘ある、成唯識論述記の一枚の版木、廣島縣御調神社所藏の嘉禎二年の刊記ある阿彌陀經及び普門品、同三年の刊記ある金剛壽命陀羅尼經の版木(此の三は近時國寶に編入せられしもの)の次ぎに列すべく、本邦古刻史上重要の位置を占むべきものにして、又吾宗に取りては大師出世本懷の大著、吾宗立教開宗の大典の唯一無二の古版木なるを以て、實に宗寶の第一に推すべきものにして、宗門の慶事と謂ふべきなり。

本集古版本の元久版及建暦版の開版有無に就ては、大に研究の餘地あるものにして、正確なる史料の發見を待つに非ざれば斷定し難き問題なるを以て、今暫く此の二版本は擱き、現存版本中刊記あるものと、なきものとを羅列して、聊か其の種類の辨別を試みむ。

元來本集の版本は「佛書研究」所載高瀨師の蒐集目錄に依れば、刊記あるものゝみに

ても、無慮六十餘種を算ふる多數あり、今余は延應已後足利末期迄の版本と認むべきものゝみに就きて、其の種類を檢するに、刊記の有無両本に就き七、八種の多數を算し得べし、鎌倉以降足利末期迄大約三百年間、其の間大半は戰亂を以て蔽はれたる、所謂暗黑時代にして、鏤版の術幼稚なる上、然も淨土宗は未だ寓宗の域を脱せざる時に於て、斯く數度の開版ある實に驚異の事に屬す、而して其の現存版本を見るに皆整版にして、春日版及び野山版等の和版の系統に屬し、行數及字數も此の種の版式に多く見る六行十七字詰にして、欄界及び界線なく、書體は寫經風の豐麗優雅のものなり、裝禎は粘葉綴にして紙の表裏両面に摸印せり。

(甲)刊記本

一、延應版　　法然院所藏本

延應第一之曆沽洗第六之天挍根源

正本直展轉錯繆卽寫印字用令流布矣

右の如く本文と同大同體の文字を以て尾題の後、一行を隔て、二行に印刻せるものにて、各版中字體最も優秀のものなり、上冊七十八葉、下冊五十二葉。

二、建長版　　西本願寺所藏本

建長三年七月　日　　願主入阿彌陀佛

と尾題なく卷末本文の次頁に右の刊記印刻しあり。

三、正中版　　久原文庫所藏本

正中二年十月　日　　比丘了延刻

右の如く尾題の次に二行に印刻せり、此の久原文庫の所藏本は惜しい哉零本にして、下冊のみ現存せり、此の版は各種の內最も特徵を具へたるものにして、六行十八字詰に印刻せられ、字體は延應版と異なるも豐麗遒勁なり、卷冊は本末兩卷に分たれ、第八三心章より下冊として、其の卷頭に選擇本願念佛集末と題せり、他本の下冊には題號を置かず、又第九四修章より分冊せるとは大に相違せり、憾らくは上卷散逸して見ることを得ざるを、下冊六十八葉。

四、永享版　　新知恩院所藏本

此の本は延應版の覆刻なるを以て、彼の延應版刊記の後に異筆の字體を以て、左の如く三行に印刻せり。

奉開板選擇集者爲法界衆生往生極樂令

安置東山知恩院　　勸進沙門靜秀

永享十一年己未十二月二十五日

奇とすべきは今回發見の版木と對照するに、版木には此の刊記の第二行全部と、第三行十一年の一の字と、十二月の十の字とを削去しあるとにして是何れの爲に削去せるにや、安置云云を削りて前行の文だけにては全然意味をなさず、又十一年一を削りては干支相當せず、實に兒戯の削去といふべし、案ずるに此の版木或る時代知恩院より、他に持去られたることありて、其の際の出來事かとも想像せらる。

（乙）無刊記本

一、久原文庫所藏康樂寺舊藏本

此の本體裁行數字詰等總て延應版に異なりなけれども、上冊第一章の私釋段第一問答の答に、迦才の淨土論を引く下、「其證如此不足疑端但諸宗立敎」の文中但の一字脫字せるため、第二章段已下字配りには相異なきも、行數は一行宛短縮せられ、最後の頁延應版は第六行にて終れるも、此の本は第五行にて終れり、字體は延應、正中の二版に次で優麗なるものなり、因に康樂寺は信濃國更級郡盪崎村に在りて、親鸞門下西佛房開基の寺なり。

二、佛教大學所藏岩田慶淳署名本

此の本の體裁等又延應版に異なりなきも、字體稍劣れり、特徴は下冊四修章中の敬の字の大半は缺畫して敬の形となれり、署名者慶淳は蓮如門下の人なり、以て開板の時代を窺ふに足る。

三、大雲院所藏貞安上人所持本

此の本の體裁等亦延應版及び無刊記の第二の版に似たるものなるも、開卷の往生之業念佛爲先の割註の下に三分弱を隔てゝ本の字印刻しあり、又下冊第九章段の初葉左最初の行の餘業の文字、餘案と誤刻し、第十二章段最終の焉の字爲と誤刻せる特徴あり、此の所藏本の外には、佛教大學所藏寫字堂之藏書と二行に刻せる楕圓形の印影ある本(此の印影寫字臺となすべきを誤りて寫字堂と刻せるものゝ由)及び久原文庫に古經堂の藏印あるもの上冊一部同版なり、此の外に東京市傳通院所藏本は、上冊の一部分を見たるのみなるを以て、詳細に定め難きも、此の版と同種か左なくば第二のものと同版と思はる、兎に角此の第二、第三の二版は辨別餘程困難にして、上に陳べし特徴の外、下冊第十一章段第一引文の觀無量壽經の觀の字の畫の具(岩田慶淳本)略(貞安上人持本)等に依り、辛じて其の異版たるや否やを知り得るなり、此の両版は何れ

か一が原版にして、他は覆刻版と想像せらる。

四、法然院所藏の一本

此の本亦延應版等に異なりなきも、字體他本に比し最も醜劣不齊整にして、就中下冊第九章段の初葉右第四行及び第六行の「聖衆等」の三字の如き、字體矮小殊に其の最も甚しきものなり、此の外の特徴は上冊卷頭「往生之業云云」の割註の直下に、上の名號と同大の文字を以て「本」と刻せり、是れ第三の版の「本」の字とは位置及び大小を異にせり、此の外に誤刻非常に多く、其の中二三を摘出せば、第二章段の私釋段の十行目「依正二報」は依正行報となり、同章段の最終頁初行の「上在一形」は正在一形となり、第三本願章の私釋段の五行目「何時何佛所發此願乎」は放此願乎となり、第八三心章の私釋段の「內」の字は悉く肉と誤り、第十化讃章の私釋段の終三行目の「由心散故」は白心散故となり第十五護念章私釋段の最終行の「延年轉壽」は延擧轉壽となる等、實に枚擧に堪へざる誤刻多々あり、此の本は多數現存せるものと見えて、大雲院に貞安上人所持本の他に一本、久原文庫に古經堂舊藏の零本上冊首缺の一本、宗教大學所藏の二本、野上運外師所藏本等、六本を參見せり、皆同一版種のものなり、此の版は便宜上足利末期として取扱ひ置きたるも、或は德川初期開版と見る方妥當ならん。

以上余が實現したるは右の如く、刊記本無刊記本各四種都合八版にして、此の外に未見の版本にして異種の本あるやは計られざるも、先づ以上の版本に就て考ふるに其の多くは延應版系統のものにして、卽ち永享版の外に無刊記本の四種は宛んど此の系統に屬するものなり、其の內康樂寺舊藏本は稍異點の甚しきものなり、正中版は一見全く別途の系統に屬することは知らるゝ處なり、建長版は最近實見の機會を得べきも、今日にては唯卷末刊記の部分のみ、實物大の寫眞を見たるにて、未だ全般を認めざるを以て、今俄に斷定しがたきも刊記等の位置より考へ、又義山上人刻本の跋に「建長以降刊者咸從延應云云」の跋あるにより考ふるに、矢張り延應版系統のものなるべし、而して此の延應版の版木が知恩院に現存し、且つ同系統の永享版に「令安置東山知恩院」の刊記幷に版木現存せるより推すれば、此の系統の開版は吾淨土宗徒尠くとも鎭西流徒の手になりしものと想像せらるべし。

又此の無刊記本四種開版の前後及び年次を判定することは至難の事にして、何人と雖ども能はざる處なるべきも、單に字體の巧拙及び現存流布の多少等よりして恣に臆斷を下せば、無刊記本は上記の列次の如き順序に依りて開版せられしに非ざる歟、卽ち第四の版本の如きは字體最も劣惡にして其の現存數も余の見たる處にては、

他本に比し此の本のみは多數を算へ得るを以て、最後に開版せられしに非ざるか、暫く愚見を記す。

尙此の古版に關聯して一研究を要すべき事は、平氏の序文にして、以上の八本を始めとして、元祿六年迄二十餘種の開版あるに其の各本悉く平氏の序文刻しあらずして、其の已後のものには悉く同序文の印刻しある事なり、然るに今此の延應版と永享版との開卷の袖に筆寫しある序文を見るに、何れも共に南北朝時代若くは室町時代の書體にして、此を現行本の序文に比ぶるに行文平淡古雅にして、字數も約半ばを減ぜり、今決疑鈔裏書及び大澤見聞に註釋のため引出せる文句に對照するに、能く適合し、現行本の序文の文句は一も見る處なし、又現行本及び延應版本の筆寫の序文は撰者の官名を兵部卿とせるに、裏書及び見聞には刑部卿とせり、今對照に便せむ爲め、延應版本に筆寫せる序文を左に錄出す。

新彫選擇本願念佛集序 兵部卿平朝臣基親作

夫以專稱南謨之敎門者。直至西刹の要路也。不但釋迦金口之宣。亦爲彌陀素意之願。二日三日執持名號之證諸佛舒舌。十聲一聲必得往生之義吾等銘肝。爰空上人有一軸文集之書。號選擇本願念佛集。秘密壇行人疑。卽身之觀故可閣之。大小乘學者愛隨心之法

故難操之。於念佛之衆生者誰不歸哉。因茲雖知埋壁之誡。還胎彫版之印。於戲玄元聖祖五千言。令尹早著上下之典。本願選擇數十張。門徒將得摺寫之益。思德之志古今惟同者歟。于時辛未之歲建子之月。聊勒意樹遙傳來葉云爾。

永享版に筆寫せるもの亦此と同一文章なるも、撰者名の記入なき點相異せり、是に依り考ふるに現行本の序文は後世德川時代何人か其の當時の輕佻浮華の世潮に感染し、大に潤色の筆を弄せしものと見ゆ、忍澂師亦此の譏を免れず後の潤色の序文を用ゐて決疑抄の凡例に「平氏序文諸本不同。文有增減。而於義無違。今則依見行印本所載」と記し置かれ、後人をして眞の序文に接するの機會を尠からしめし罪は逃るべからざるものならむ。

以上宗史宗學に暗く、又本邦書史學に無知識なるをも顧みず、烏滸がましくも此の臆斷を爲すの罪は敢て甘受する處なり。大正九年仲秋到彼岸日華頂山下に記す。

故の宗教

石井教道